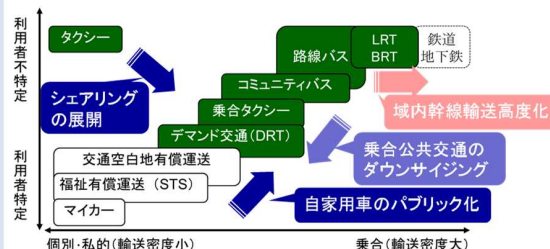


【foR-Fプロジェクト】 超高齢社会における「福島版MaaS」モデルの構築 (経済経営学類 准教授 吉田 樹(研究代表者))

本プロジェクトは、人口減少と高齢化が進行する福島県において、小規模かつ短距離の交通需要に対応したモビリティ(「小さな交通」)の持続的に確保するための方策として、国際的に注目されるMaaS(Mobility as a Service; モビリティのサービス化)の「福島型モデル」を実証研究に基づき構築することを目指す。

課題認識

- ◆ 人口減少が加速し、**集約的な輸送が困難になりつつある**なか、**日常生活に不可欠なモビリティ**をどう確保するかが課題。高齢者は**ラストワンマイルのモビリティ**が提供されなければ、活動機会の制約を受けやすい傾向がある。
- ◆ 人口減少・超高齢社会では、**小規模かつ短距離の交通需要に対応したモビリティ(「小さな交通」)**の確保が求められるが、**運転士不足**が深刻化し、**供給制約**が強まる。
- ◆ ICTの高度化により、**ユーザー同士がつながる「小さな交通」**が注目されるが、**需要自体が小さい**ため、**経済性**が発揮しにくく、**事業継続**の点で課題が少なくない。



【図1】在来公共交通モードの方向性

MaaS(Mobility as a Service; モビリティのサービス化)への着目

- ◆ 公共交通とユーザー同士がつながるモビリティを一体に提供し、**利用者自身が最適なモビリティをシーンに応じて選べるしくみ**。交通事業者の枠、商用車・自家用車の枠を超え、利用可能なモビリティを定額で利用できる仕組みや、ユーザー同士の結びつきをアプリを活用して行っていることなどが特徴。**経済性が発揮しにくい「小さな交通」の持続的な提供方策としても期待**される。
- ◆ フィンランドで開始されたプロジェクトを皮切りに、世界各地で検討されているが、**国際的な技術開発競争の一方で、地域課題との「ギャップ」が存在**している。また、わが国では、公共交通サービスを営利事業として提供してきたため、プレイヤーの少ない**地方部からモデル構築を行うことが期待**される。

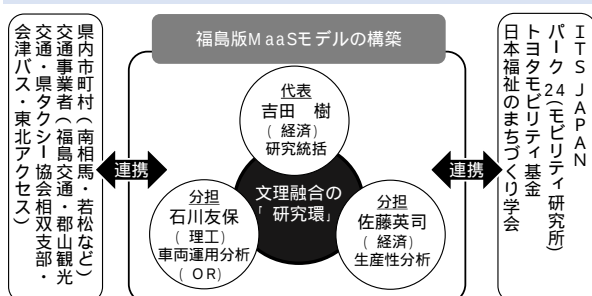
プロジェクトのねらい

超高齢社会における地域交通モデル=MaaSを福島県内の実証研究に基づき確立

1. タクシーの「シェアリング」と「自家用車のパブリック化」を対象として、**需要やアウトカム(活動機会の増進)**の特性を明らかにするほか、**配車データや車両運用から生産性を検討**する。
2. わが国におけるMaaSの制約条件を整理したうえで、MaaSの社会実験を県内で行い、本県の導入可能性やMaaSによる地域課題解決の可能性を考察し、**MaaSの福島型モデル(「福島版MaaS」)**を構築する。

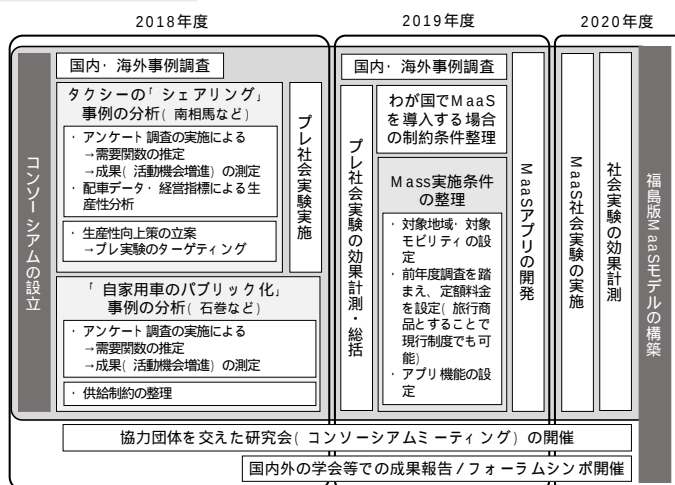
コンソーシアムの形成

- ◆ 石川友保(理工)、佐藤英司(経済)両教員との「研究環」を組織。
- ◆ 県内自治体、交通事業者のほか、MaaSに関する専門技術を有する企業や学会の研究者と**コンソーシアムを形成**する。



【図2】コンソーシアムの形成イメージ

研究計画



【図3】研究計画

期待される成果

1. MaaSの日本版モデルの先駆けに…**技術と地域社会の「なじみ」に着目した実証研究**は全国的に稀少であり、福島大学の新たな「強み」とすることが期待される。
2. 福島県・イノベーションコースト地域における「新たなモビリティ社会」への貢献。
3. 学生教育と一体のプロジェクト化により、有為な人材の輩出に期待。